道二翁道話
全部六冊
百十一丁

ロ仁9
1538

中澤翁道話二編
刻集題巻端
說話神儒釋老道
懸河唇舌衆般神

門 ロ仁9
番 1538
巻

中澤翁道話二編

刻朱題卷端
說話神儒釋老原
懸河唇舌震乾坤

但州 湯嶋 中屋長左衛門

但州湯嶋

縦如蠧魚毀之筆
深顧盡心知性論
平安淇水主人

道二翁道話二篇巻上

八宮齋輯

道須臾離べからず。離べきハ道にあらず。此道ことによつてゆるが。何ぞ道らしいものが有る。道ハ朝から晩まで別も切て有るまじ。心學の力がなんと和から見へぬ。道ハ上下に明らか。誰が起しもせぬけれど。夜があけると空がしらじらしかゆ。すゞめハ雀の道。からすハ烏の道。犬ハ犬の道。猫ハ猫の道。鶏ハ鶏の道。鯉ハ鯉の道。鯨ハ鯨の道。鰯ハいわしの道。少しも違ふものハなし。其外非情の草木にいたるまで。柿の木ハ

柿の木の道。栗の木はくりの木の道。柳はみどりなれ紅ゐ。おのおのが道の通りを勤めおこりて。少しも道に背くものはなし。万物一体道の外に教もなく教の外に道もなし。人もまた人の道が有て五倫五常の外に人はなし。そもそも母の胎内に一滴の水が宿るや否や。道はしぜんと備り切てゐるなれど。かなしい事じや生まれ子が次第しだいに知恵ができて仏に遠くなるぞかなしいじや。ちいさい時はとと様かか様といふて付慕ひ。こう様かかさまがちうとの間でも見へぬと。をろをろして歎き出る。其善じや。父母の外に心はなく。父母ばかりじや。

是は生まれぬ先から天地自然のこしらへぬきとので。則是が道じや。それが次第しだいに知恵づきて仏に遠くなるぞかなしきとは。其まま貫きの道をなくするゆへ。鬼となることぞ恐しき。道に離るれどもしらぬものなれば。ただ物事に執着するゆへじや。執着とは物に取りつく事じや。放心するのじや。放心とは向ふへころげると心を取放して。此方は留主。是ゆく見るに取りつき。目がむくと何が欲しいかほしいと見るものにとりつき切てみるじや。ふまれて道を皆もどるる遠ざかつて離るる

道にいふは。道とは何んぞ心の事じや。神道といふも
心の事。佛道といふも。心の事じや。儒
道では放心といふ。佛家では迷ひといふ。放心といふ
より。迷ひといふが子供衆や。女中方の耳なれて
きこゆる故へ。迷ひといふが聞よい。扨此教といふは何ん
ぞも外の事ではない。此迷ひといふ事がある故へ。
聖人佛が此教を御立なされたものじや。此教じや
よつて神佛聖人の御作でもない。天地自然の道には
迷ひといふ事のない事を御知りなされて。其道理を
御教なさるのじや。迷ひ故に教へ入ぬ一切万物畜類

鳥獣草木に至るまで。天より請得る通りの道を勤
めおはる故へ。迷ひはないぞ。氣の毒なものは人じや。
それ〳〵の道を往ればよけれど。道もない所へ往んとする
故へ。よけもない事が出来る。輪廻の道を行けば
怪我はないに。外道やいだてんのれで。往くまいも往ぬ所へ
無理に往んとする。堀も洞も有れど其難所が
目にかからぬ。危ひ事の天道じや。誰でも知れた事の
様に思ふて居れど。知もせぬじやて。知れぬ證據をいふ
て聞しませう。是は今年の何月幾日に。死ぬるといふ
事知るものの知りもなん。是は今年の何月幾日に

分散する。何月幾日に逝落する身投する首くゝるも
中するといふ事知つて居る人も有りやせまい。知らず
して毎年色々の事が出来るじやないか。
皆うかりして覚悟がないゆへじや。君子ハ此覚悟を
みさるゆへ日々に新に慎ましくの心懸が厚ひゆく
怪我がない。此怪我の本ハといへバ迷ひからじや。その
迷ひといふて見ゑぬ身内蛇といふ虫が窓から
の表からつひと這入て生気の隙間でおりていし
てある。明ひゆく向ふへゆかれるとやつておいて
道もない所へ落入する立ゆくもへ何んの事いないよ。

其立ゆる事を知らぬじや。聖人の教ハ此立ゆる事
ばかり。去年も江戸で十一才になる子が前訓を
学て此立ゆる事を知てる子がある。其子が何心なう
遊んでおられバ。駕かきがらんじあよて駕かいて来る。
其子何んも志らずに居られハ駕棒が息杖で子の脊
中をきつくあたつた。其子大きに腹が立されど。イやく
実が。前訓で学き。堪忍の所じやと。じつと辛く。
家に立ゆりて見れバ何んの事ハない。腹立がやんだ。
夫から内へ戻りて。親御達にその立ゆりし事を咄し
宥されハ。親御様ハ大きによろこんで。全く前訓の

御蔭でかざりしと。人とても風流して悦んで
ござる。其子一生栄雅の種は消て仕舞まい
ふて。私も悦びましく。一切の事が立ゆりて見ますは。
向よ悪ひ事はない
「我これよ人よ悪きがあるよの人のあしきは家あしきなり
皆我身よ立ゆりぬ也。主を恨み親をうらみ。終には家
を失ひ身を亡す大事の事じや。皆銘々身よゆり
見る腹の中よ我が有ば懺悔をなされませ。親
ある人ならば。親のまへへ手をつき。主人ある御方な
らば。主人のお前へ手をつくべくしはかゝりしよ

存じ居りまして。御恨を申ましこと。さぞ御了簡なし
下さりませとざんげして。御詫なされませ。懺悔の
功徳は無始の罪業消滅すると佛様の御説きに在れ
さようその筈じやかどよ。身によりみて御詫
なされませ。身に悪業さへなくは懺悔へ入らぬ事
なれど悪業なしの人とてもなひものじや。朝の晩
まで見る事聞ことの二つの始め。五塵の内でも見聞
の二つを深く戒て有る目と耳とから悪くが起る。
寝さ時は悪くはなひ。寝ぬ時どうも悪くが有るぞ。
寝ぬ時は丸く佛様じや。盗人が這入て何やこのや。

引提てをるなれど。あんかうして見ぬ教へしてござ
る。貴賤ひ事じやぞく。無念無念の本辨じやとろくり
と釋でござりませ。此時ハ三千世界もなく天地も
なく實相無漏の大海じや。乞食の讀ぞ奇よ
寐る首のへ人よかゝらぬ迷ひおとうき世よの人。暁の鐘
寐る時何が有ぞ。釋迦も孔子もなく。熊坂長範も
なく。犬も猫もなりしざるり。十万石も百万石もなく。
玉樓金殿もなく。金銀財宝も官も業も繇多も
乞食もなりくい同事じや。寐る姿を知らう
見まへ付る。武士ハ親子も寐てある母親もあり。乳

吾子もなりかのうんハ見ても寐て居るものハ何ん
にも知らぬ。物の見るに清ても少しもかまはしと
なく。天地同根同性丸ごく我なし。虚空同辨。此時始
而知衆生本来成佛ナルヲ。能よ考て御らうじませ。
是尊よしき御なあじやぞく。叔目が明くとうれ
世よの人。暁の鐘が少んと鳴ると直よ今日の
よくがたじや。雀ハすずめの鳥ハからすの友ちらく。
かあし。柿の木よ柿が出来栗の木よ栗が出来る
此外よなハなんぞ。神道とやうても佛道とやうても儒道
とうても此事じや。観見法界草木國土悉皆

成佛と天地の万よ成佛せぬものハ何があるぞ。禽獣草
木にいたるまで悉皆成佛。各性命を正しうして。その
分限に随ひ君子其位に素して行ふ外を願ハず。
富貴がいらぬといふて。春咲ずにいる梅もなく。
來がいるといふて頼しう鳴て鶏もなく。節季より
銭が足らぬといふて欠落したる犬もなし。難病平
癒の為に西国四国巡る狸もなけれバ。不仕合で
従弟の親類を尋ねて。かりに行く蝮蛇もなし。
皆天命に随ふて。分外を願ひ求むる事なく。一切
世話入らず成佛せぬもの何があるぞ。人ばかりの

成佛せんにおよる。此世界ハ情なき人間がとらまへるもので。
實相無漏の大海に五塵六欲の風ハ吹ねども随縁
真如の波の立ぬ日もなしと目が明くと随縁とて。
見るにつけ聞につけ。何がほしい。かがほしいと迷ひ
まわる。哀しいものじや皆目が覚めぬゆへじやぞよ。
此迷ひを立地にさとらするが立地の教へ。立地成と丸で
夢じや。立地事を知らぬゆへの教じや。佛家では
火宅といふも又八万四千の地獄といふも此ハアスウくく
の事じや。目が明くと。何がほしいかがほしいにどよ
あさいきしいハまるハどよいせう。狀ハしよいせう。

子供の行末がどふなろふ。何といふても金の事じや。金がなければどふもならぬ。此事が三面おく氣が付ては今の経儀へせぬものと孫子の後まで教て跡でもかまはぬ。先でもかまはぬ。是を八万四千の地獄といふ。極楽といふになると一ツく増るなら極楽立ゆるおゐり。立ゆりてみるとむしろのよふ。極楽世界。又立ゆる事がないと。玉楼金殿も。ハアスウく皆しと鉦うつ晩まで八万四千の地獄也。縮緬の二重よまわれく。造り榻ろ座敷て語仕さして仕めしを喰ひながら。あと敷して居ろしが

やうな因果なもの。皆ホンくの身きものじやぞ。蛇めが行くまりホンくして。ホンく草臥くさまて後には仰向に成て。ぢりくまいしてゐる。此等はまだよいのじや。今一膳あさりが来ると。ハアスウくといふて。拍子に火の中へほいと飛び込で仕舞ても。けしからぬ。合点が行ぬ。愚人夏の虫飛て火に入る。火宅の気しても皆我の手から飛び込むのじや。それじやで行の気よ。

「来てみればこゝも火宅の門なるを何様してかのがれん」

明神様の御歌よ。行しと息よ心をふり捨てゝ何となく住べきまゝし。此住ましてよいのじや。かれ

なん。皆銘々の胸の中が修まりし様。親子兄弟夫婦も
ともに一家親類睦まじう家内和合住まいし。此住
まい様をしらぬゆへ。まづ何んのかのと互に口舌
合ふて住まひしてゐる。勿体ない事じやぞへ。
さりながらけんにおゐてもうしてはならぬことがならん。
鳴子とは己が羽風におどろきて己とさわぐ村雀哉
傀儡師胸にかけたる人形箱仏出そふと鬼を出そふと心を
仕よふは楽な事じや。仕舞ひ苦しい方と楽しみと
思ふて気を張て詰めてゐるが小人の常じや。孟子曰
不仁者可與言哉。安其危而利其菑。楽其所

以亡者トアリ。是が小人の楽とする所。是非もない事じや。
皆思ひを利と思ふて我身亡すことを楽しみとして
ゐる。是をたとへて見れば。盗人めが家尻を切る時に。
内の様子を考へ。どうぞ目を明かれまいのと。自身も
危ひところに働いてゐるゆへ。ふるひくしておるど
常から首尾能く切負せると。ヤレうれしやと悦ぶ。
是がこれ皆思ひを利として身を亡すゆゑんのもの
と楽しむといふものじや。扨又ちと縁し恐び
入る根戸棚よりの儀で取るとおねさるまい。
どうぞおれがよいかしくと露しく是もそろく

壊敬して。ヤレ〳〵嬉しや〳〵皆思ひを刈とするの
じや。是から門へ拍出すとどこぞ知もせぬわいごく。
兎足抜足で徐々表に首尾能ふ出てヤレ嬉しや。
此時知恵が首のまはりを落てあるもまだヤレ〳〵
うれしやと我身を亡すゆゑんのものを楽と
するのじや。何んとマアせう心もないへしくじや。
是が盗人ばかりの事じやない。何ぐるの刈をされては
ヤレうれしや。庇機を首尾よう責付ケてあるは
まし。人目は首尾能ふ繕ふはヤレ嬉しや。向ふの
総気は手繕此方の勝手さへよければ先ようし〳〵。

するより災を刈として身を亡ゆゑんを楽とし
てゐるが皆破心や狩の中へはまるのじや。それを痛い
と思ふてヤレ立帰るとて破心じやとはまる
ぞくらひ。神道佛道の教へ聖人君子も段々として
世話なさる訓是が教へじや。賢人の教へ子孫長久
の道より外へはない。小人の目から見ては甚だ淋しい
事ゆへ此大道を往人がない。斯よ
「人多き人の中にも人ぞなき人となれ人人となせ人
君子の大道は行人がすくない。兎角破心や狩の方へは
行人が多ひ。其筈じや。縦て連が多ひほど又うけ心

ほん色々様々のものが並べたてゝある先ツ一口見よ。
蠣焼貝焼すゝりこん汁うまいものだらけじや。その
上羙しいと云ふ饌の菓子や。饅頭や。大頭
物や吸物や。みんなくいしんぼうに喰られて
呑や噛や手先まで噛の庭まいくのまひきさへ一向
甘まい。一寸先きは知らぬしやな。鬼の罰じや。ソコテ不忠
不孝の者は枚は山中首をくゝり。銭も金折のかひ懐に
へさがりし藪の中に知らぬ事じやなれと。皆
此がけ道を好みし家。皆まつくらう起る其ほどく
のそれが為にいくるの二つなふ。故に君子は其の人

ざる處を戒しめ慎しみ此の心の所で知らぬ事。此の事ハ
いかに芝居も見るなたゞぬぞ。酒も飲ますなと申ぬぞ。
茶屋へも行すなと云ぬぞ。己れが其の身の自由な
る事じや。君子の大道は楽しみをして世の人のじや
ない。酒も飲むがよい。楽所へも行くがよい。楽しむがよい。
行所は其程よいものじや。其程にして楽しむがよい。
それを楽しむがあまりに迷ひじや。皆此の心の思ひやうが
迷ひゆへじや。聖人の道は知りするがゝじや。知らると
いはふ其の分限を越ずして行儀よく執り行ひ世界と
中よしで暮すのじや。是で常が大事じや。ま゛常

と怯しと思ふが肝要じや。皆能よく言ふ事じや。あろと出来ねてある心経に書ふされたど。出来るかくりつがどうも有るので。三界唯一心天何言四時行百物成ト此心がはやちらく細々に出来るものじや。なれ是をちらがしでわれがものにしてゐるじやによつて。是は皆ねばならぬぞれかどういふ人でも道なんと出来ぬといふものが身を亡ぼすものじやさらしれ悪ひ事はせぬ無理はせぬ欲心は持ぬ親達は其身の此外に数へられぬ別に学ぶ事はない。是ではないと我ものゝ合点して。ちやんと貴く人でゐる人が有

ものじや。是がぶつもならぬて孔子でも。釈迦でも是でもとら事はならぬ心の駒に手綱ゆるする戦を競ひ日々新又日新なり。是でもとらぬ事をなへそれに手綱なしの駒に乗つてゆくどこまで行くもとまらぬわづかなる事じや。是は須臾も離るべからず。引留る手綱がないと。どのやうな事が出来もしれぬ。思ふて常に警しておかねばならぬ本心と知ぬと可愛がつてはならぬも悩ひとつとても無ひ。お家はありけ此可愛がるのが欲ひどうの国のもの下知らもせぬ人を大切にして。往来へ行きて

まつより妙見山へ通し駕で連て参られ遊山ぶ
で花火焼て見せられ其仕舞は勧進溜りへ落
しられ心中しられ首くゝりしられ是はあんまり
むごいことじゃ。しかして心ねがはなれぬ天道
の事じゃ。何んぼ松屋の極楽でも此ほどたくさんと云ふも
のでござんせう。傾城と云は城傾けると云て昔から何んぼも家国
をかたむけらるる皆可愛ことゝ云ふもうらしいに
とをもつて悩ひのなるとのもうら北条時代の
塩治殿ちるとのおうごの塩冶が出来なんぞたなど一
ふく吾むる引き出る手綱がかなうつら。一家中を

ちりぢりにして経儀するぞ口で編して口での
云ひ合ひたく人中でども地面ほされるこ
て善悪邪正は天地に明らかな事じゃ勝れるじゃ。
常にして常が大事じゃ。常に大事を極めて
おちかはなしぬ路こ皆後の中に仏中も身投も
首くゝりもある。また男も盗人もあるぞ。孔子も釈迦も
厳のある是皆後の中に行る其中へ此知来る心浅
静まる為の教じゃ。日々に新に戒々続々に戒しめ慎しめ
るとしく弘法大師の詩に
法性の無漏路とは見れど我も人も有為の浪風立ぬ日もなし

随縁まかせの浪の立ぬ日もなしと噂の因縁に云
まで。アイかんにんと出来心慎しまねバならぬ大切な事ぢや。
此お京に居るの事で有さが夫の留守に友達が遊び
に来て。女房ハ何心なく火燵で仕事して居る。
又友達も夫が留守なれバつまりに云ねバ寒ひなどじや
と。いふ内女房もおなじく夫が留守じやと立
て。ちと火燵の火がよいとあたられると
友達もおなじくそのツイ火燵に当るのじや。是
がこれといふ心のなんの気もなくなれるで。
寝まではなんの出来心もなんが彼火燵にあたりて。一ツ二ツ

触る内ツイ手がさはり足がさはりちよいと戯れく
足の先きがさはるやら又ちよつとお出来心で居る
ひとのじや。ほくらやの火ながらの常に用心せねバなや
ならぬ所じや所へ夫が戻つて来て夫を殺すまで
かゝが出刃庖丁ぎんまん切りつて突きまでて間
どうも大きな事が出来心じや。始め友達が内證あける時
何んの気もなんにもなく八分の所へ往て居男して仕出
に出刃庖丁で突合せうと思案して来きでもなし。
門口を這入るまでもまだ火燵へ当るまでもなんにも
ならなんだれど。ツイ出来心。たゞそのものじやよつて

常と恨しまず様ならぬ時安楽なくして苦が起る。何がほしい、かがりしいも。道がないゆゑじや。夫は結句不自由な所にあるものじや。其貧窮な人の今日の世渡りに追ひ廻されてせわしないは。道を行ふてみるものが有るものじや。年寄親に女房子で家内五人是を男の足二本で其日過ぎ。大根をかついて日ぐらし一日売りあるけば。日暮に戻りて草鞋もぬがん。是楽でなや先づ今日も弐百文。扨も有難ひと思ふては。ソレ米買ふてこれ。是は薪代ソレ油ソレ味噌代と夫々にちらして渡し。どふぞ。明日も日和なればよいがん

がしや。夜食も食ふて寝る所は極楽。一日の草臥で前も知らずに寝る所は万貫目の金持も遠の足も明るまで何んにも知らずに寝てゐたが。扨目が明くと草鞋売らねば。今日も此日和様有難ひと。又荷を担ふか よげたらんで何んがかん家業の家を見ても テモ 結構な家に見えたろか。此ものは家に苦労しないもの思へば。大根を担ぎまはる気遣ひげないたん。又友達が向ふから来る。検は大勢どてく友達が今日は休んで坊主めを拝まして因縁参りソリや。能ふ参りやる。参つておじや。ヨイわく今夜は仕廻ふたらまいらん

ものじや。扨檀家衆は精出しかして。坊主めもさら
りと見えて来ておまゐりと思へばかり。そのう
浦山しんがる顔。大根の分から何人も知らひ
望みはなし。誰からも見られはせぬ。又どのやうな好
色深ひ人でも。向からも蔑しむやうな鬢が来る。
テモ見しいと見るさびしやり。あまりはどこの娘じやと
誰も向ひても見ぬ大根して今日に追出されて。
こゝろも知れもする事はない。あらしあひものじや。そ
れがモウ下樋の未が二つもんも有やうになると。モウ
何がけしんかぶりしんはその鳴ぐ人のこのきるよで見ゆれ

ぬのと。あらしきかける。是じやまふつて身が大るのじや。
心得ちがひなしぬ。此身の有難ひ事。能く御合点なさ
さりませ。或は腫物でも出来る時分痛ひよくるしむ
時どのやうなぞどのぞ此痛するしゆつての何もよ
ずんはソレ身を知よじやなんか。どうぞ今一度本腹さ
してりさりませ。此くるしみを助つさつ何ぞよびん
皆身を知よ。是がちがつと本腹してヤレ嬉しやと思よ
がさいごモウあらしくする。此前末の成百姓かし時の
事を思ふて出られしじやませ。続く方この大騒動。又女
しい事で有ふ。小屋を来と売んで酒屋を酒代

賣買は。諸商賣じや。志ぎやうく商賣取引に熱中す
る。其時は日本國中の人〲が何を好くぞといふで
今一度安ひ元手で取まはしと木の芽や草の根
まで尋廻りて皆なにの浅可愛がり娘を賣て
食ふ事は諸道具をこしらへる事もあけても暮ても元の
事ばかり。常に其ものいはぬ小便をさまでに申し勘定
ばかりでござりますれば。しまひには孫子の主所
の人が來て來るに。毎日〱深切にしてござる。元の
相場を一向志らぬ。産までが五穀成就の願ひより
知らなんだ。是で爭の有難ひ事態に仰有り

なされませ。此時世界中の人が元の有難ひ事を
知り。お冥加をおもふやうになると。天地の御機嫌が
直り。此作も能く出來。元が安くなると。相應に穀有難て
いふことぞ。りやで。モウ何がりいひぶりて下摂に元
が一ぱいになると。此元は悪くさいと。嗅がするの菜が
なくてしもので。人ぬのにとひく志みける年ふ
忘れてしまふのじや。施行の粥を貰ひに行く
ことまで縄ぢりかけて袴着ながら挟しめの袖口
と牛の舌のやうにまくろにおしてホンくする
あんまりじや。是が女中の事ばかりじやないぞ。世界

世の人が天地の融通の御施行で今日まで命
を繋で来た事をいつまでも忘ませんぞ。物覚へ
がなふて気の毒じや。極楽好きの極楽婦らい地
獄婦らいの地獄すきといふものじや。何を呑し
てもよかろうぞ。序に御披露しません。此る事ありまし
た。碌々な妙薬でござりません。毒虫に螫れるよ。
医術の墨を付けると奇妙になをります。是は何ん
でもなふして見ると苦労がある。医術を料理する時
すみの袋の破れぬやうに出して、ちいと糸でくゝり
て陰干にして置く。白干ひらぶ。墨をそる

おし付ましたら病犬に咬まれてもちつともいたまぬ
事でござります。今一ッ妙薬あれどのくすり。是は
胡瓜をお渡してつけまする。早速平癒す。是も久
しく囲て置べし。胡瓜を小口切よして茶碗の
内に入てぐるりを張て、気の脱ぬやうにして置けば
水になる。其水を付ますれば忽ち平癒。どのやうなも能よ
覚て置て御披露なされて下さりませ。扨此火
傷に付て火宅のはなし。序に御噺しませう

道二翁道話二篇巻上終

道二翁道話二篇

下

世の中にかわる
ものはせんハなし
まのんで附きて
来るさくある
見釈庵高意写

道二翁道話二篇巻下　八宮齋 輯

先ヅ今日の笑ひ事一ツして是に立帰りて考て御
らうじませ。一日そのじいめ寒いめしてハ雨露にも濡
れ苦労とハよい大辨笑ひるのじやたんハ此代々本
の御恩此上は何ら有ぞ此笑ひるのじや目が明
くと何事ハかだほしいとぶつくするハ皆おけとし
てゐるのじや。そのおけどが積りて火宅の苦をう
ちよって目このおけどの内にすみ此事しなよ
さるがよい。扨此噺ハ前方実に有し事じや

よつて武知識に成りましても是ハ現在三世間の業と
よつて甚だ貧窮ひをしてござりまする。下京辺り
育さへするで御座りまする。嫁と姑と中の悪ひの
世間に何んぼも有るけれど是ハよつぽど珍しい
中の悪ひのじやによつて手代ハ皆去るも去るまする。
夜もねられまするくらい朝ハ目くの業が積りまして
まするに中の悪ひ朝から晩まで双方からの責ハいん。
夫ゆへ二三日も親里へいんで見ても二人の手代が
皆穢しい孫を志かして泣さけぶ手ゆへの業に責
られ殿りてゐまする。濁りて身に責られ罪も正月に

節句も意のみも体をなし半分に責つ責られ。
十月の十六日でも変の肉ハ体を有して火宅のくるしミ。
死ぬるも死なれぬ。どふもこふも仕やうがないによつて。
一二年の内に死なされる深い種でもなし世より是が
金槌婆様といふのじや。世間に親殺しの多数のやうに
子のあるハおせの敵同士の報ひのといはれ。どうも夫の
世の子でも大抵ハ善也悪ひといふ事ハ誰も知つ
てゐるけれど身に立ちゆる事がわきまへぬのじや。夫ゆへ
後の中に目に塵埃が積りての。ハアスウくと
其所を佛様ハ因縁とも因果ともいふ。聖人ハ天命

とりわけて恐ろしうてござる。それ善悪ともに因縁によつて報
よりて後の世の中へかいぞくしてまはるこ業
のじや。是によつて悪ひものゝ付合ぬやう。
随分心を清浄にして日々に悪に戦ひ競ひと怨
も恨むが子孫長久の御祈祷じや。扨此嫁は云
ぬまでも云はねば死ぬるまで死ぬるとも
姑のなかりしはうらみ業て来ぬとソコデこゝろやそのじや深
子供を殺して仕舞に気が狂ふじやぞ親殺し子
四人が御ゆるりと心を極めて恐しいものじやなんと
飼畜犬に手を喰るゝといふ事。臣其君を弑し

子其親を殺すといふも一朝一夕の事にあらず。
其上苦しみを来まね迷ひに迷ひを重ね無間地
獄の底に落入ては醒る中には幾世までも苦しむことの
で。嫁へも先へも行がよし。是人のことじやなん
ぞ。嫁姑ばかりの事じやなんぞ。皆後の
中にあることじや。ホンくがとうと色を根との事が有に
まる。欠落が散心中身投首くゝり皆心から
出来た心から事の起りじや。心中するも人の出所して列
る一村にあるものでもなんぞ盗人の出する処して盗
人だつるり仕込である。面も皆そのじやなんと皆縁と

胸の中がちつとでもかたよると持合がわるひ日まで悪木
起しますぞと。ツイかハりと出来るよつて常々
油断ハならしぬ。若手稼いるしぬ。人の気ひ悪へ違
入まいぞよ。此ふよ小気味がよひ。是ハ業の持合の
なんのじやまも腹の中にかくしても業の持合が
わるいと。直ぐ来ると思ふ大事の事じや。今の間
男夜も通り夫の留主の所へ往て。ツイ戻
もどりし女房もあわてちらし火燵へ仕舞ひ火
燵よりおこつたゞりで命仕舞つて。是が無間
地獄の釜をぬげしよつて来も悩やせねあつさう

ものじや。是まで業の積りしてのものじや。嫁が姑を
殺したも欲もはじめからある事のじや。ふたるが
火宅のはじまり
「此川其元を尋ぬれバ。葎の雫滴のしたゝ露
はじめは纔の露も流れ流れて後にハ船もしても渡されぬ。
大川となるといふものじや。嫁ハ一途につゞくぞ知らぬ
ゆへよして殺しまふと色々工夫して懇な医
者殿の所へ往てどふぞ能毒薬をおくりませ医
者どの答て夫ハ大切な事じやが。マア何なさるゝ
ぞ。ソコテ彼嫁が。しか／＼と一部始終のわけを打

悪いおいしやのかたぎし。親子四人が助かる事でござり
ませんぞ。それゆゑ道理に毒薬を下さりませといふに、医
者殿も吐息つき、是をきのどくなりとして、堪て
思案し、鍛錬なしますいつも毒薬をせませうが、
死しながら存る能にはまけりやせぬ。天命の生ずるを
其心の根をはなれて教を射い。その好うによる事この為に
難ふて呑る所が気毒ひになるかやせぬかや
なしぬ事も気の毒じやさまつて。三十日がならぬこと
取ことが好をせぬやなしぬが合点か。夫もおれはしれ
ぬじやないか。ど此際に一日も口舌へもるるなれぬ

ゆゑいかほど迂な無理をいはしやつてもさだめしと
素直にしてくださつても後立されはなりませぬ。此三
十日の内にまあ一生の苦労を三越て勤めねは
なりぬ事が出来ますか。ハイくイヤモウたとへ絞され死んで
下されますよ。三十日は扨五十日が百日でも勤め
ませう。ヲヽよしよし、夫さへ出来ますれば気遣はない。
モウ今日あたりから土産でも買てきなんで機嫌
取りしゆゑ、コレ何云ハしやつても、アイくと合点が
後も後立されはなりませぬぞ。ハイくと畏りましたと
いふて立別も板挟みて内の女のはすきの

いやれと思て咄をきやそこへ行てみれば内へ
帰るなら親内に待てござる。戻つて何で冷めしと
思ふてござる所へ嫁さへいはれぬ喜びもうして。
戻りてまさかなら親共へ詫りましたら是はおさめで
ござりませぬ。行てみれば内に帰りましたとさし
おせぬ。溜る身のうへ都して作の役色をひきまする。子
売買のならひ昨日は沢山さするの漬をもつてこましへ
まするに此銭で大根菜でも買や明日昼の菜が
有るよのと世帯をしるで何かと何事も。まだ小
入くださる。あまりにも親の夜食にする時分に菓も

こんなりと入まてまいらぬ子に溜る身の娘の胡麻
こそ酒しをとろかしまてこち。サア此所へ上げなさ
りませ溜るは何ぞ見てコリヤ何んでもの菜躍
らしい。冷めしてくだされ。まことにこちいつもの
通り妻のもの。到りのまぐろん。すこし膳椀のうぐろ
さく引きまし夜食喰ふて。又たんと塩引しませ
くすぐるける。嫁ハ子供のめし仕廻ひ。そろそろ行付ケ。
みんなで夜一日そのやうにして此ざらで此退屈よ
ござりませぬうちに此扇さすりて上ケませう。
よろしく揺出るよ。是何さんしせるものの

そうしておかいでも大事ござんせぬ。嫁ハ。ハイ〳〵と
いひながら一言の口答もせん。嬉しいものじや。
御明上ケたり。線香立てたり。姑が毎の看経やら
で御座んすが。寝させ片付なり。姑ハモウ御休なさり
ませぬか。御寝なりませ。仕舞ふてから夜具
蒲団敷て。サア御休みなされませ。だん〳〵と
いふ故。嫁が遠手に来て。あの人さんのこちへ
寝所へしてやらふとござんせぬと。蒲団ひきずり
てころりと寝る。嫁ハ。ハイ〳〵と言て裾押へたり
枕もとへ行て。火を入れ。枕屏風

引寄ちと御足さすりませう。イヤ〳〵こちや〳〵。どこ
でも歩行せず何んにもござんせぬ。ハイ〳〵と言ふが
三十日何んともなく口答もしられぬ。悪鬼婆とひられ
ど心の内に思ふても表辺ハ随分大切にするも親舅
の事じや。故翌日朝もとふから起き飯ごしらへ
して奥から口まで奇麗に掃除して。たゞ今モウ御
起なりませぬか。姑ハいつも寝所から起て
昔ひけるに。今朝ハ寝過して。ぢつくり目を明き
嫁がせんをとりしも。そこら見廻しても何んにもいはん
すがたなん。夫でアイ今朝ハ頭痛がするなれど起ふや

ねん起ませうと。ぐずく起て手洗を遣ふ。其の間に
嫁はちやんと飯ごしらへの所へ座ぶとんしきた
ばこ盆に火鉢も出し場拵りして待ている姑は
手洗を使ひしも何ぞ云分して云ふと思ふても何
もいふ事がない。叔母も其様な者じや若しも顔し
てめしを喰に嫁は姑の給仕を仕舞ひ朝飯として
髪を梳つけや姑様は私ちよつと妹の所へ往てまゐり
ませう。姑は一寸謂ふよつてどうなりと。御得手になさり
ませ。ハイといふて嫁は又彼医者殿の所へ往てきますから
らの滋身を知りくと妻(?)にも物絶すれば医者じやの

帰てそれでもし。叔茶をしらへて起ましてしんぜ
さらしやれと奇麗な重箱にばん鉢二三十枚食て。
此内に彼が仕出で行る色々る験の見事るにすると
目立て悪ひ自然と癖で死るしやうと抜にないと
泣で此方が為をすることのもいふ見りなで三十日の名
どやかどくに世ものゝ事に姑の足納さうしめるやうに
力らんもをまして泣で姑盆にかへやうに随分に孝
行にさうしやれ。コレ何云へしやつてもアイくと合点がいく
最りましこ何かし何事いるも世話でござりました。楽
名提て立ゆりだら統是今ゆりましてもいへても。

婆様ゆゑひ穀してさへ喰てござる。だから母の粥が足の
ようやう〳〵持てござるきせるが鉄棒の様に見へまする。さりなが
あの身が所ドもて手を添くされぬ妹の方より何事くるよ
ますてくまとらへて押付ましてちやを似たなさら
ませと指おるん婆さ母も満足致ますもかへ申ましたら。ひき
ませて一ツ二ツ喰ふて後は佛だんの下へ入まで置まし。
嫁はサア仕て出ろうと娘びまうり猶て亡をそし
氣を付ケて後は毎日〳〵色々と勢くつけまをくて都屋
あるるゆよせ五合ろさらしある時分は酒の酔して仕ん
せぬう。或は茶をのんならして餅を焼さう為

おりなされますと。草履を出し杖とあてがひ腰紙
らく三度のめしは何んなりと婆さ母の好のものを
ぱら〳〵息もせんとする氣に入ぬ中〳〵おしりて
こしらへて機嫌をとり。寐起は撫さすりハイ〳〵と
いふて介抱するものじやによつて。さしもの婆さ母
いろそうなは。コリヤ何んのことじや此中よ志しまでは何
にも役立る手がらさへ指り能て何んにも用らなし。
仕せう来なりしよ佛壇で佛さ母だんのり拝りてご
ざる。看経しても、どふ申す時から拍子が違ふてはのへ
る氣に成り。ハテ合点の行ぬアノ嫁は何ぞで魔でも見令

てハいぬと、ふ義立なさるゝもなかりしことよ。毎日毎夜
のみか聞る所もなく親切に気を付て呉るゆへ。どうぞ
せめて一生のうちハ自身ばかりの楽を極めて来さ。ソコデ
嫁様も麁しそだいせず、はやく出来し。ハテめんどうな
事じやアノ姑のせんハ気でなし、あの人に何も悪ひ事ハ
なんぞどうして拙夫ハあの人が憎ひぞしらぬ。目が
さめて先へ立ゆきける。サア爰がたまゝの所じや。地
獄の罪人も黒ざゝの性の消る時節がある。是からは成仏
の縁じや。此時嫁女の本心の光明が露りと出て照され
うけて有難ひものじやないか。傀儡師胸よりけしかる人

眞紅佛性と鬼をまぜてとまじや。嫁ハ一途に此日
の事がくやうて有ゆへ、ひよつと改心して孝行する。嫁女も
ひよつとうしろぐらく。ハテ御縁ぬあの嫁がどこが悪ひ
ぞよふ見ても悪ひ事ハすこしもないのに見まて何んで
憎んだ事じやぞ能ふ思ふて見さしやれ。ハテ微塵もさハ大
きな業人じや。末期の心を惜くもふもあの人
よりかゝるなんぞと可愛息子に添はんたるの
嫁を憎んだハ何するぞ。ころりと了簡が立て帰る。
有難ひものじやぞへ。性ハ善也。人々己に貴き事の
と知合して居るなれど。大方の此月に気をとられた場が

慾しさ。身にはたゞかりおもしてさゆるすあらぬハ。皆悪心坊の業じや。姑様の悪心の気がおきてまゐると。能いこともいやじや。今度はそろく姑様の方から嫁に出の機嫌をとるでござる。見ておれも此寒ひのにちやうと仕舞て了ふ火燵へ当らしやませいの。嫁ハハイくといふて何も寒ひ事はござりませぬ。おまへ様が寒ひ時分に出なされませ。出捨病が起りませう。姑様がイヤし己ハ此ろう大分こちらが能ふござる。案じておるなと。嫁姑のむつましきことといふものじや。嫁の気ハうそじやけれど。親の勤が本意じやとして姑

わるくして渋々に嫁がかほふつて来ます。是うきあくん坊の姑様が自分の入も物にくり込で重ことのを兎角しては嫁にあたり嗔しうり正直なものじや。嫁ハ何いふても。ハイくと心易ひ顔のうちおまへさまは不自由のなかゐますなされてござりませ。イヤくそふじやござらぬ。年寄が物くといふて何よしやうぞいのと姑殿は段々心持が面白ふ成て来ると。家が来て繁昌の引わけても色々のことをこれわしが見るにさの下気がきたり損じてゐる。是をマア気中ましとおしげもなくずらく。姑様は気に大気につきくしなくさ。能いまいて

ものじや。心ねさへ美しうなると。何んにも彼は皆心のことじや。とかく心さへ足納すれば此まゝ極楽
「足納をすることせねば其の胸の中に地獄もあれば極楽もある。此比も嫁女の顔付がぎすぎすと嫌しうなつて来て。嫁の顔色の悪ひを案じてコレこちの此間うらき
う顔色が悪ひのじやも悪ふはないかいや。今頃ふて下さると。子供の疳気は知れたることじやが。あれもこれも太辞忠義なることじやたとへ合点でも味はなくば何んならでも気にらぬ。おまけに得は随分頼まれぬやうにしてありますれども真実真身親子の如く嫁が可愛ふて後には田舎

もせう聟もせうと思て来た。夫に済ぬものは嫁じや。胸算用がくるりつと違ふて。是はマア何んの事じやぞい。一向よけの知れぬ様に思て来た。ハテめんようなる事じや。あの嫁女は何んぞ気に付ておやせぬか知らぬ。あんまりで合点がいかぬ。是までは大ぬきの鬼ども猫のやうに思ふてゐたが此比の様子では世話をもよふまれる仏婆々じや。アノやうな猫を殺さふとは去とては勿体なや。ヨウ罰が当りなんだ事じやと嫁まで又目に見えて来た。有難ひものじや
「雲晴れて後の光りと思ふなよもとより空に有明の月

「しかるを生れ付きハおそわるけど皆悪いよかすれゐるもの。是が能しるものでげす。どうかれ嫁の心の内ハ姿様を殺す気なれど。體の行ひが孝行の仕業じやによつて。姿様が佛になりしやつたものじや。是で能ふ合点なさりませ。口でどのやうにいふても。心がどのやうでよても體よ行ハねバ役に立ぬ。何んでも身に勤めねバ利益がない。「朝夕おのがなる業が大事じや「何事の教もまんなふむねども耳じけなさよ深うなる此度ハ嫁女が悪心に因が見えて来て。コリヤどうしてある事でハないと速に醫者殿の所へ走りて往ぐやうで

だら様の死なしやる薬をのましてくださりませ。醫者ハ驚ひすそうなれども合点の行ぬ三十日請合の療治までお目もやれぬよりするゆゑ心得じやどんの。イエさうじやよのことのハござりませぬわの佛も同然のやうなだら様を下服よしらハ何んの事ドやらでござんすぞ。先日よりの薬の消るやうな薬をのましてくださりませ。醫者殿様よ得心なさるなら。ひたすら頼んで様を殺して気ハ御ならぬ勿体なし何んのことをしやりませう。醫者殿深く流し。お出なさしやうとく能ふマア其心得て下さるとのう。気ぢひうさしやんる。何にも毒ハ見せせぬ。ふかう

の実語と申す教(をしへ)をふとまで云ひ語さんしやうこそ。
よくしの事であらうが。御親(しん)類方に怪我(けが)家のなんぞやう
に仕(し)落ハなかりし色(いろ)々工(く)夫(ふう)し。知識(ちしき)に此事を尋(たづね)て
来べきハ只一大事(いちだいじ)の事が出(で)来もしまぬでぞなりし
ましてハ人もひとつ見図(づ)りよって其身を修(す)めまし
たが首尾(しゆび)よふまいりて両互(ふたつ)に両目出たひ出(で)来(き)ますが大
事じやぞよ。随分大切に孝行(かうかう)さっしやましとたがひに
傾ひ氏も解(とけ)合(わ)ふて其(その)醫老(わかいしよ)も今に会得(がてん)させる
持よし取りましょ。此やうな出しんす人も有るものじや。
まし有難(ありがた)ひ事でござります。此醫老衆が知識で

有さゆへ。御方に怪我(けが)なかりこそ。さりながらなんとどのやうな
ることがあらうも知れぬといふ事じや。是で能々考(かんがへ)て此
らいじませぬ。なるほどさうしても。極楽(ごくらく)ハ安(あん)まいと
思ひますハうそではしても罪(つみ)ハ遁(のが)れぬ嫁姑(よめしうとめ)の事なから
じやないハ皆銘(めい)々身のことも。此やうなもの色(いろ)々不智
て。何んぼでもあるものじや。そこで今よりどのやうな
無(む)理非道(ひどう)をおみ(むり)けても。なるが三十日の気を取て今の
望(のぞみ)の身でもさへすれば。三十日くらぬ内に首尾(しゆび)よ
お縁(えん)者(すむ)ものじや。それ斯銘めても見ずにどうのこう
のと小言(こごと)をいりいふて暇(ひま)に行ふして苦(く)しむ。

まうけるなりけるじや。又どのやうにしても中の虫がぬ
のハ。やうだら此方の腹の中の鬼の業じやと仰せらう
めなさるさかい。此家内の如くするもハうそふして
も極楽ハ本来となる。其にうつくし心なれハ虚を
みしても地獄ハ本来じや。からすへうそをいへ盗みして
しまうと。仏になうく盗する気ハござりませぬ。
とどのやうにおひなけしても。死ハ道をまぬ。首ハころり。
じやによつて。此真妄の二ツを能分ち極天地の間
に身を入る事ハなりませぬ。故に道ハ須臾も離るべからず。
時々刻々に仏を用ひねハいろのうち無間の業が

寛政八年丙辰秋八月發行

静安舎之部

江戸日本橋壹丁目
須原屋茂兵衛

京都麸屋町通御池下ル町
近江屋荘兵衛

大坂谷町筋錫屋町
本屋吉兵衛

弘所書肆